

# 第3回文京区アカデミー推進協議会(スポーツ分科会) 議事要旨

日 時 平成27年7月15日(水) 18:30～20:30  
会 場 文京シビックセンター3階 大ホール会議室2  
委 員 会 長 青木 和浩 (順天堂大学准教授)  
委 員 鴻瀬 太郎 (小学校PTA連合会 会長)  
委 員 田辺 武之 (文京区体育協会 副理事長)  
委 員 森岡 隆 (文京区国際交流フェスタ実行委員会 委員長)  
委 員 小林 博 (区民公募委員)  
委 員 金坂 吉雅 (区民公募委員)  
委 員 黒田 千恵子 (区民公募委員)  
事務局 熱田 直道 (アカデミー推進部オリンピック・パラリンピック推進担当課長)  
細矢 剛史 (アカデミー推進部スポーツ振興課長)  
松本 美恵 (アカデミー推進部スポーツ振興課スポーツ振興係長)  
眞野 文孝 (アカデミー推進部スポーツ振興課施設等担当主査)  
支援事業者 株式会社創建 氏原・本多

欠席 委 員 井上 充代 (文京区スポーツ推進委員会 副会長)

資 料 「次第」及び「第3回分科会の進め方について」  
施策体系(案)

## 議 事

### 1. 開 会

### 2. 議題

①分野別計画の新しい体系案について、基本目標・基本的な方向を検討

事務局より、前回までの分科会の振り返りについて、説明が行われた。資料「施策体系(案)」を用いて、施策体系(案)、分野別の目標、基本的な方向について説明が行われた。

事務局 分野別目標1(4)に「障害者スポーツの普及振興」がある。これまで区は障害者スポーツの振興に取り組んできた。より普及することを目的に、ここに挙げているが、他の委員の意見を聞きたい。スポーツは障害者と健常者の区別なく交流することができる。こういった視点を前面に出せるのではないかと考えている。

分野別目標4「スポーツを通じた仲間づくりと交流」は、これまでの議論が整理されており、新しく掲げてよいと思う。

事務局 分野別目標4「スポーツを通じた仲間づくりと交流」の人間関係、交流という視点が重要だと考えている。2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大

- 会を見据えても、大事な視点になると考えている。
- 障害者スポーツの普及振興については、なかなかうまくいかないこともあるが、大事なことだと考えている。
- 黒田委員 この体系案の中で挙げられている内容を見ると、ソフト面を充実していく施策に見えるが、逆に、ハードに力をあまり入れないのかと感じる。バリアフリー化や衛生面で整備を進めていくということが書かれているとよいのではないかな。
- 小林委員 現体系を引き継ぎつつ、これまでの議論も踏まえて作りかえられていてよいと感じた。この体系にぶら下がる事業についても考えていきたい。
- 森岡委員 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を一つのテーマとして掲げてもよいのではないかな。大会終了後もどういうものやことを残していくかということを考えることも大事ではないかな。
- 鴻瀬委員 例えばトップアスリートに接する機会があると、その種目に興味をもつ。文京区として、区民の気持ちを喚起する施策を実施して、ゆくゆくはスポーツを通じた区のブランディングができるとよいと考えている。
- また、スポーツを通じた人とのつながりは区内に限ったものではない。だからこそ、文京区の特徴を出していけるとよいと考えている。
- 田辺委員 競技としてボウリングに取り組んできた。2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会という大きな流れも重要だと思うが、様々なスポーツを草の根的に広げていく活動も重要だと考えている。子どもの頃から様々なスポーツにふれて、子どもの頃からスポーツを継続するきっかけづくりに取り組んでいけるとよいと考えている。断片的、表面的な盛り上がりでブームとして終わってしまうのではないかなという懸念を少なからず抱いている。
- 事務局 仲間づくりという視点はよいと思う。2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会については、国際交流の側面もあると思うが、この分科会ではスポーツ面で議論を進めていきたい。
- 青木会長 施設整備については、バリアフリー化や国際交流に対応するという視点はあってもよいと思う。また、文京区らしいスポーツの推進を考えたときに、子どもの運動離れといった課題や東京ドーム等を活用したブランディングという視点も考えていきたい。
- 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会について、あらためて、委員の意見があれば聞きたい。オリンピックに出場する選手を育成するという視点は区の施策としてあまり現実的ではないかもしれない。区の強みを踏まえたいので、施策を考えたい。
- 黒田委員 先日、オリンピック・パラリンピックに関連するイベントを無料参加で実施していたが、チャリティで、例えば収益をパラリンピアンに寄付してもよいと思った。パラリンピアンの中には競技への金銭的負担が大きい人もいると聞く。彼らをバックアップするという視点も重要だと考えている。
- 田辺委員 そういった選手が区内にどうか把握できていない。
- 青木会長 そういった内容は今回の新しい体系案の分野別目標1から4には入ってい

るのか。

黒田委員 全てに関わる横串のようなイメージかもしれない。学びを深めるという視点でオリンピックやパラリンピックを位置づけられるとよい。

青木会長 オリンピアンやパラリンピアンについて学びを深めて、応援するということが大事なことだと考えている。

小林委員 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会について、ボランティアの体制を整えることも重要ではないか。会場の施設整備、案内など、国体の開催時に行っていたことをよりよくできるとよい。

田辺委員 子どもたちがボランティアでチラシ配りを行っている事例もある。

事務局 区でもスポーツボランティアを募集し、90名ほどの登録がある。

田辺委員 文京 LB レディースは選手やボランティアを募集しているのか。女子は中学生以降にサッカーする環境が減っていると聞いている。

事務局 今年、区と地域が連携して創設した区内唯一の中学生以上の女性を対象としたサッカーチーム「文京 LB レディース」では、選手を募集している。チームに加入するために転入した人もいと聞いている。10代から50代まで幅広い世代でチームが構成されている。

黒田委員 そういった情報は生涯学習の分野にはなかなか入ってこない。多世代が交流して様々な学びや経験ができるということが生涯学習の分野でも情報が得られるとよいと感じている。

事務局 庁内で、そういった情報交換が充分にできていない。

黒田委員 相互に連携がとれれば、生涯学習のサークル紹介にスポーツ分野の取組も周知することができる。

事務局 社会教育関係団体は、生涯学習とスポーツの2つの分野があるため、そうした情報をうまく活用できるとよい。

森岡委員 ドイツにある文京区の姉妹都市のカイザーслаウテルン市との交流の中で、スポーツに関する取組ができるとよい。

鴻瀬委員 例えば文京 LB レディースの情報発信は、世代ごとにメディアを使い分けて行えるとよい。また、スポーツは「する」ことが主な目的かもしれないが、「観る」ということが一番のきっかけとなる。適切な情報発信を行ってけるとよい。

青木会長 スポーツに取り組む人には「観る」「する」「支える」というプロセスがある。生涯学習の推進とスポーツの推進を区の中でどのように整理し連携していくかが、これからの課題といえるのではないか。

森岡委員 スポーツというと必ず勝ち負けがあるものということか。

青木会長 日本では、勝敗を決める競技がスポーツという認識をもたれている。スポーツの先進国では、チャンピオンシップとエクササイズの両方ともスポーツと考えられている。

事務局 文京区らしいスポーツのあり方ということを考えてもよいかもしれない。スポーツの語源は「離れる」という単語に由来していると聞く。競技もそうだが、日常生活と異なる取組をスポーツとして捉えてもよいかもしれない。

青木会長 高齢者のスポーツは生涯学習分野が主体となっているものが多いが、健康づくりとのすみ分けも考えなければならない。

黒田委員 高齢者のスポーツとなると、福祉の分野へ、たらい回しになってしまう。

青木会長 福祉の分野など全ての取組をスポーツとして受け止めてもよいかもしれない。

鴻瀬委員 学校と連携できれば、子どもと一緒に取り組むことができる。子どもが、もっとスポーツにふれる機会があるとよい。

小林委員 サッカー以外でもパブリックビューイングができるとよい。

事務局 オリンピック・パラリンピックは、特に、する人より「観る」人の割合が多いと思う。競技観戦は、ひとりではなく、皆で楽しむという視点が重要だと考えている。

また、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会については、その後のレガシーとして残るものをよりよいものとするために、他の分野ともしっかりと連携していきたい。

黒田委員 施設のバリアフリー化などもその場しのぎでなく、効果的な整備をしていけるとよい。まちの中をより動き回りやすくなるとよい。

青木会長 レガシーを考えたときに、施設のバリアフリー化、ノーマライゼーションの取組などまだ課題は多く残っている。

金坂委員 日本は既に一定程度の水準にあると思うが、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を機に一層マナーの向上に取り組めるとよいと感じている。

青木会長 ボランティアやドネーション(寄付)の文化、おもてなしなどさらに変化していくタイミングなのかもしれない。オリンピック・パラリンピックは競技のみではなく、理解する、応援することも重要である。

事務局 パラリンピアンへのドネーションやボランティアは重要だと感じている。もっと選手と触れ合える機会をつくれるとよい。

黒田委員 アスリートと直接交流ができてサインをもらえるとうれしい。「支える」取組を活発にするために、例えば、応援のイベントに5回参加したら応援グッズがもらえるといった取組があってもよいかもしれない。

鴻瀬委員 パラリンピアンは障害があるとはいえアスリートであるため、一般の人がどのような手助けができるかわからないことがある。子どもの頃からどのような部分で手助けが必要になるかということを教えていく必要があると考えている。

事務局 選手は障害だと思っていないという話や戦争から戻って障害者スポーツの世界にきた選手もいるという話を聞く。子どもの頃から広い視野をもつ機会があるとよいと感じている。

小林委員 子どものスポーツについて、学校の部活動も重要なことだと思うが、ここではふれないのか。今の中学生は2020年には20歳くらいの世代になっている。

青木会長 中学校と高校で体育連盟が別の組織になっており、スポーツに関わる国の所管が文部科学省と厚生労働省と異なっているため、なかなかまとまった議論が難しい現状がある。しかし、スポーツを「観る」ことに関しては、世代は関

- 係ないので、議論していけるとよいと考えている。  
障害者スポーツについては、総論賛成、各論反対というケースがまだ多い。  
現場レベルでどのようなことができるかを考えていきたい。
- 黒田委員 子どもの頃から障害者、健常者の区別なく一緒にスポーツに取り組める機会をつくっていけるとよい。
- 事務局 支援を考えたときに、指導者が障害者を講座や教室に受け入れられる対応力を有していることが、大事だと考えている。また、障害者のある方がどの程度スポーツをできるかということは千差万別であるため、適宜本人に確認しながら対応していけるよう、指導者を育成していく必要があると感じている。
- 鴻瀬委員 コミュニケーションのきっかけづくりが難しいかもしれないが、子どもも含めて一緒に考えていけるとよい。
- 黒田委員 そういった点を整理して、中高生のスポーツボランティアの場づくりができる  
とよい。
- 青木会長 学校の現場ではどうか。
- 小林委員 学校でもこのような取組が実施できるとよいと感じている。

### 3. 閉 会

以上